

五月三一日(水)

二コマ目の課題をサツと提出し、早めに学食へ移動した。いつもより少し広めの場所を確保して、ちよつと早めに弁当を広げる。

「おお、哲朗じゃん」

コンビニから出てきた藤堂と目が合った。彼は本を数冊手で持って、僕の方に近づいてくる。

「今日も相変わらず、弁当なんだな」

「まあね。学部が変わったって、何にも変わらないさ」

藤堂は向かいの席に手をかけ、スツと腰を下ろした。僕の顔を少し見るなり、「そうか？」と言った。

「ちよつと疲れてるように見えるけど。勉強のし過ぎか？」

「え、そんなにひどい？」

僕はスマホを取り出して、インカメに切り替えた。自分では何かが変わったようには見えないが、周りにしか分からないものでもあるのだろうか。

「おいしい、哲朗くん」

教室へ通じる廊下の向こうから、黄色い声が聞こえて来た。賑やかな女性陣のしゃべり声が少しずつ近づいてくる。藤堂は声の方を一瞬見やって、僕の顔に視線を戻した。何かを察したらしく、小さく頷いた。

「心理学部生つてのは、モテるんだな」

藤堂は随分と茶化した口調で呟いた。彼に何か言おうと口を開いたが、その前に隣まで来た上坂さんが藤堂に声をかけた。

「そこ、空けてもらってもいい？」

藤堂は上坂さんらの方をチラッと見て、何も言わずに座席を立った。座面を手で払い、「どうぞ」と譲ると、隣の席に移動した。上坂さんは「どうも」と藤堂が座っていた席に腰を下ろした。その隣に青柳さん、僕の隣に鈴木さんが、ランチが乗ったプレートを持って座る。

「で、話つて？」

上坂さんは豊かな胸を強調するように、グツと上体を乗り出した。ちよつと湿

度が高めな空気に、フワッと甘い香りが混ざって鼻腔をくすぐる。僕は食事を脇によけ、手を拭いてからカバンを引き寄せた。その方から三冊、同じ雑誌を取り出した。

「武藤さんというか、森田さんから預かって」

僕は彼女らに、出来上がったばかりの同人誌、ヒイラギを差し出す。上坂さん、青柳さん、鈴木さん、三者三様に嬉しそうな表情を浮かべ、食事をよそにパラパラと中身を確かめている。

「藤堂も、いる？」

僕は自分用のをカバンから取り出し、藤堂に差し出した。彼も彼女らのように受け取ってパラパラめくる。

「お前のが載ってる訳じゃないのか」

「サイトの運営は手伝ってるから、スタッフではあるんだけどね」

彼は「じゃあ、いいや」と返してくれた。

「で、この人たちは？」

「彼女らは全員、掲載されてる」

僕は藤堂に、作家先生の名前を順番に紹介していく。彼女らはみんなドヤ顔で藤堂に挨拶する。

「心理学部の女性作家か。お前、中々、えげつない付き合いしてんな」

「えげつないは、流石に言葉が悪いよ」

僕はチラッと女性たちの顔に視線をやったが、誰も大して怒っていないように見える。そういうところも含め、水面下でストレスを感じているところもはない。藤堂は、それを察してくれたのか。

「瑞希ちゃんとも付き合い合ってるのに、お前ばかりズルいよ、本当に」

「だって仕方ないでしょ。哲朗くんは、あなたと違って面白そうな男だし」

上坂さんは、突き放すように言った。藤堂は大して声を荒らげることなく、自然な口調で「つまらない男は、退散しますよ」と立ち上がった。

「皆さんでごゆっくりどうぞ」

「お心遣い、どうも」

藤堂はスツと食堂を出ていく。僕がその背中に「じゃあ、また」と声をかけると、彼は振り返らずに、手を挙げて去って行った。

初出 令和三年五月二〇日 ノベルアップ+にて公開